

## 編集後記

人間科学論集社会学篇も第6号を発刊できる運びになりました。原稿をお寄せいただいた先生方にお礼を申し上げます。

学部開設前から、学部の論集の発刊をどのような形で実現するかは、私たち人間科学部の教員にとって大きな検討課題の一つでした。学部の研究、教育の発信の場の確保はとても大切なことだからです。心理学科、社会学科の教員が集まり、何度も論議を重ねて、心理学篇、社会学篇の2冊を学部論集として発刊することにしました。そのほうが、それぞれの学問研究を深めて発信できると考えたからです。

こうした経過を経て学部論集は6号を数えるに至り、この方式が定着してきたように思います。ただ創刊号と比べて学科の専任教員の論稿の掲載が少なくなってきたのが少し気にかかるところです。かくいう私も、役目かくる小文しか書いておらず責任を果たしていないのですが。以前、勤めていた大学では、学部紀要に執筆することはオブリゲーションだと言われていました。こうした考えがあってもいいのではないかななどとも思います。

文学部に所属していたころ、『専修社会学』という社会学専攻の雑誌発刊を切望され実現に貢献された故芥川

集一先生（当学科の前身、文学部人文学科社会文化コース発足時から就任）は、学部の学生に教員がどのような研究をしているのかを伝える役目も紀要にあると言われていました。そして、教育の成果として学部生の卒業論文要旨も掲載しました。現在は、本誌には卒業論文・修士論文の題目一覧のみを掲載し、社会学科のホームページ上に卒業論文の要約は公表しています。社会文化コース発足の年に専修大学に赴任された故西川善介先生は、学部4年間で十二分に学生を教育できると言われていたことを思い出します。従って、学部の卒業論文の中にも十分評価に足りるものが出てくるとのことではなかったかと思います。学部学生の研究成果については、当面は、社会学科のホームページを活用して公表し、本誌は、専任・兼任教員を中心として、大学院博士後期課程の院生の研究成果を世に発信していくということではないかと思います。本号では、本学博士後期課程修了で、名古屋学院大学で教鞭をとられている玉川貴子先生も投稿されています。

以上、さまざまなことを書き連ねましたが、本誌が発刊当初めざした「他人の権威に頼ることなく内なる権威を創造」できるよう内容の充実に努めていきたい所存です。読者の皆様の忌憚のないご批判を願います。

(社会学篇編集主幹 宇都榮子)